Japan Society of Obstetrics and Gynecology

（札幌医大）
工藤　隆一，松浦　正裕，金上　宣夫
佐藤　俊昭，小森　昭人，橋本　正淑

子宮内膜間質細胞は着床にとつて重要な因子である事と間質細胞由来と想定される腫瘍の組織発生を検討する意味で正常の間質細胞を超微形態学的に観察した．増殖期初期の所見は，細胞質は少なく，細胞小器官の発達は乏しく，その数も少ない．細胞間には細胞膜の dense な area と関連して collagen が認められ繊維（芽）細胞の形態を示し始めている．11日目，12日目と日数が進むにつれて，核はやや不規則性を増し，細胞質も一層増加の傾向にあつて細胞小器官の発達も著明で数も多くなる．更に排卵期にいたると ribosome も豊富になり細胞小器官も多くなり，ごくわずかにグリコーゲンの蓄積も認められる様になる．排卵後7日目，着床期にいたるとグリコーゲンの量もかなり増加し，拡大した小胞体も認められ，Golgi 野の発達も著明となる．更に28日目，29日目にはほとんど拡大した小胞体で細胞質を充満し，Lysosome も多くなる．以上を要約すると未熟な細胞が分化し，増殖し，更に成熟して自己隔解の経過をたどる．

次に光顕上間質細胞に類似した細胞が増殖する腫瘍，いわゆる Endometrial Stromal Sarcoma と呼ばれるまれな腫瘍がある．本腫瘍の特色はミトーゼがほとんど認められない，単調な腫瘍細胞が増殖している組織像で一見したら忘れられない程の特異な組織とも云える．超微形態学的に見ると核はほゞ類似の紡錘形をとり，細胞質は少なく，細胞小器官の発達は悪く増殖期初期の像と類似している．細胞間腔には小胞体の割には collagen が多く充満し，所々に細胞膜の dense な area があつて，これに対応する様に collagen が存在して，fibroblast 的な形態をとゞめている．又本腫瘍を Hemangiopericytoma と命名している者もいるが脳に出来た Hemangiopericytoma の電顕所見では糸球体内の dense body, solid endothelium のコードの増殖が観察されているが，本腫瘍ではこれらは観察されない事からも Hemangiopericytoma と同一に出来ないと考える．

質問　（慈恵医大）塩塚　幸彦

1）月経周期24日を過ぎると，いわゆる predecidua cell が出現して来る．この predecidua cell と他の間質細胞と区別して検討されたでしようか．

答弁　（札幌医大）工藤　隆一

24日目以降については26日目の所見が少ないため28日目のものしかはつきり云えません．それ以前についてはほゞ連日観察しています．とにかく当初の目的は組織発生という問題よりこの研究を行なつたわけで，そのアウトラインを並べたわけです．

答弁　（札幌医大）工藤　隆一

明らかに云える事は分泌期にいたり細胞小器官の漸次発達の他にグリコーゲン及びある種の顆粒が認められこれが着床期をピークに著明となります．この事は着床と何等かの関係あるものと考えます．

109．子宮頚部における Reserve cell の偏位，変動に関する実験的，病理組織学的研究

（久留米大）
加藤　俊，安部　宏，○有馬昭夫

（緒言）子宮頚部においてしばしば認められるいわゆる Reserve cell（以下 R.C. と略）は，その発生並びに他病変特に子宮頚癌との関係が注目され，多くの報告が見られるようになつたが，R.C. の動態については現在なお一致した見解が得られていないと考えられ，ことに性ホルモンとの関係については種々の論議がなされている．このような観点より子宮頚部における R.C. の動態について，主として臨床例を中心として検討し，併せて性ホルモン負荷による関連については動物実験を加えて検討した結果，若干の興味ある知見を得たので報告する．

（実験方法）臨床実験として，閉経前，後の生検2006例，又，手術剔出例からは Estrogen 優位の疾患及びそれ以外の良性疾患，悪性疾患に区分し，計70例についての子宮頚部亜連続切片を観察した．動物実験では，成熟 Wistar 系雌 Rat の去勢後 Estrogen 投与群，Progesterone 投与群，対照群について R.C. 様変化の発生に関して検討を加えた．

（実験成績）臨床実験では，生検例における R.C. の出現率は閉経前32.9%，閉経後 9.7% であり，R.C. の分化についても閉経前に多い有意差を認めた．剔出例における R.C. の総出現率は84.3%で，Estrogen 優位の疾患群において有意の出現率を認め，R.C. の増殖，分化についても同様の傾向を認めた．

動物実験では，Estrogen 連日筋注投与群の子宮頚部にヒトの R.C. に極めて類似する細胞群の出現を認め，R.C. 増生より Metaplasia へと連続的に観察されたが，Progesterone 投与群及び対照群ではこのような R.C. 様変化の出現は1例も認められず，Estrogen との関連性を示唆される成績を得た．

（結語）R.C. は子宮頚部の殆んど通常の構成成分で

NII-Electronic Library Service